「破壊者たち」書評 1

◆すさまじい体験

ようやく『破壊者たち』の最後のページを閉じました。読書という次元をこえたすさまじい体験でした。言葉が言葉を凌駕し、よくも自己免疫不全に陥らないものだ、作者のこの精神力の強勤さはどうだ、とばかりに驚嘆いたしました。

協奏する三つの流れの各章はその破壊と殺戮の様相をそれぞれ合わせ鏡のように反射させながら、巨大な破滅の渦をつくっています。

言葉による描写が映像以上の迫力でもって、この本に対峙した者の眼と脳みそに喰いこんできます。こんなに震撼させられた小説はありません。三つの流れの文体もよく考慮されて、その具体的な表現を支えて見事です。また、作者の透徹した死を見据えた眼線が、この本を下支えしているのが並たいていではないと感じさせられました。

『破壊者たち』がひとりでも多くの人の眼にとまることを念じつつも、ふつうの読者はどれだけの破壊の言葉の渦巻きと旋風に耐えられるか心配になります。それほどに圧倒的な力を感じます。このご本がこれからの世界を照らす鏡とならんことを切に念ずる次第です。

とにかく心から敬意を表します。

これからもずっとすごい物をお書きになると思いますが、どうか新しい旗手となって日本の文学を覚醒させて下さいませ。

（「まほろば賞」特別賞受賞作家／金沢市／寺本親平）

◆暴力と破壊との相違

『破壊者たち』有難く頂戴いたしました。マネキンを壊すバイトの青年と、ポル・ポトの少年兵ユオンと、エノラ・ゲイの乗組員たちの圧倒的なモノローグの痛切さに、無自覚の裡にマネキンと化していた私の心が戦慄しました。暴力と破壊との相違を考えさせられた次第です。根源の主題に真正面から挑まれているその作家としての誠実さに頭が下がります。

（作家／勝目　梓）

◆身の毛のよだつ終末感――「破壊者たち」を読む

『破壊者たち』は「東京」「Ｃａｍｂｏｄｉａ」「ＥＮＯＬＡ　ＧＡＹ」の三話で構成されている。この三話は、表面上は何の関係もないように見える。三話は交互にというより、捻れるように展開していく。「東京」の語り手である「僕」は、ある高層ビルの３４、３５、３６階のフロアに詰め込まれてある膨大な量のマネキンを破壊するアルバイトに就く。二日間ですべて破壊すれば、日当の六万円に報奨金として十五万円が加算されて二十一万円になる。「僕」は鉄パイプ、斧、長鉈、バーナーなどの道具を使って、片端からマネキンを打ち壊していく。生命のない人形ながら無言の非難の視線に

晒されるようで罪悪感をおぼえるが、それでも構わずに兇器を振るいつづける。

「Ｃａｍｂｏｄｉａ」の語り手の「私」（チア・ユオン１７歳）はポル・ポトの兵士として、クメール・ルージュ（カンボジア共産党）に属する。家はもともと農家で、父母と妹はロン・ノルの政府軍に殺された。ロン・ノルが失脚したあと、クメール・ルージュは、元政府軍の反乱分子を片端から殺害する。「私」とて例外ではない。それ以外に生きる道がないからだ。略奪、殺人、拷問、陵辱、生き埋め、生爪をはがす、人肉を喰う僧侶をも殺す。まさに無政府状態で、その残虐性は酸鼻のきわみである。

「ＥＮＯＲＡ　ＧＡＹ」は、米軍のＢ29「ＥＮＯＲＡ　ＧＡＹ」が「スペシャル」と称する原子爆弾を積み込み、南西太平洋上のテニアンの飛行場を飛び立ってヒロシマに向かい、日本時間午前八時十五分三十秒にヒロシマ上空から「スペシャル」が投下されるまでの状況が描かれる。機長のティベッツをはじめ、各自任務を負った数人の乗組員たちの独白ややりとりはただならぬ興奮と緊迫感をはらみ、「スペシャル」の投下でたちまち煮え滾るキノコ雲に包まれたヒロシマはまさに放射能と火の坩堝で、その地獄の惨たらしさに言葉を失う。

「東京」「Ｃａｍｂｏｄｉａ」「ＥＮＯＲＡ　ＧＡＹ」の三話は、それぞれ独立した作品として書くことも可能だろう。しかし、作者はそうはしたくなかったのだ。「東京」の一個人「Ｃａｍｂｏｄｉａ」の一国、「ＥＮＯＲＡ　ＧＡＹ」の原爆、この位相の異なる三話を交流させることで、現在、世界中を覆っている巨大な暴力の危機感を象徴的に、そして総合的に描出したかったのだろう。三話の中では、いちばん穏健に見える「東京」で描かれるマネキンが不気味だ。何ひとつ反抗もせず、さまざまな凶器で打ち砕かれるままになっている空っぽのマネキンが、そのまま生身の人間にすり替わってもおかしくない恐怖感を漂わす。このマネキンは、人間の仮想の姿ではないだろうか。

『破壊者たち』はつまるところ、暴力にたいする逆説のレジスタンスの書ともなっているのだ。これまでの原爆小説は、すべて被爆者の視点で描かれてきたといっていいだろう。原民喜『夏の花』、大田洋子『屍の街』、井伏鱒二『黒い雨』、林京子『祭りの場』『長い時間をかけた人間の経験』といった名作はすべてそうである。（井伏鱒二以外の作家は被爆者）それをこの作者は初めて原爆を投下した側の視点で書いている。これはまさに意表を衝く発想であり、失敗を恐れぬ果敢な挑戦だといっていいだろう。これまで、こんな発想をした作家は誰もいなかった。

作者は小柄な人だが、書かれる作品の大方はスケールが大きく、主題は重い。取材力も凄いものだ。どこからこんなエネルギーが出てくるのだろうかと思う。なかなか余人に真似のできることではない。

ハーマン・メルヴィルの『白鯨　モービィ・ディック』（千石英世訳）のなかにこんな言葉がある。「力のある本を書くためには、力のある主題を選ばねばならぬ。大きく自由な主題は威力はかくも強烈、かくも壮烈、蚤を主題に選んだ腐朽の名著がものされたためしはない」また、日本画家の鏑木清方はこうも述べている。「心が余って枝が足りないのは後で見ても我慢がなる。枝が勝って心の足りないのはやりきれないものである」作者には、何を書くにせよ、「決して蚤の文学にはしない」という覚悟があるようだ。志の高さが並みでない。作者は今、３０００枚（原稿用紙４００字詰め）の長編小説を執筆中と聞いている。途方もない企てであり、活力である。期待は大きい。作品が完成するまえに、身体の方が破壊しないことを祈るばかりだ。

（作家／飯田章）

「破壊者たち」書評１

◆視野が広い

この『破壊者たち』の書評は結構むずかしい。タイトルの破壊者は、破壊、物を壊すという意味でなく、人を殺すこと。そして、この作品の中では三つの物語が同時進行する。一つはクメール・ルージュの大量殺人のあったカンボジアのポルポトの兵士が主人公。二つ目は，近未来都市で、そこではアルバイトで青年が大量のマネキン人形を壊すことを請け負う。このマネキンは主人公の破壊に対して声を発する。いわば疑似殺人である。三つ目は広島に原爆を投下したＢ29エノラ・ゲイの機長をはじめとする無線通信士、射撃手などの乗組員などの出発から投下まで。

人を殺すことは同じでも、それぞれ事情は異なる。同じ作者の芝居「核の信託」を以前に観たが、この芝居では核保有国のエゴから起こる核戦争というとてつもない人類の災厄を防ぐためには国連みたいなところに核を預けること以外に方法がないのではないか、という主張だったように思う。今回の「破壊者たち」では、爆撃機エノラ・ゲイの原爆投下迄の内部のプロセスが詳述されていて興味深かった。この作者に感心するのは、いつも作品の中での視野が広い事である。ポルポトの兵士の物語、アルバイトのマネキンを破壊する青年の話も。結末は広島の原爆炸裂の瞬間のようなまばゆい閃光に呑み込まれて終るのだが、すべてが終わった先に作者はペシミズムを越えた希望を見出そうとしているのではないだろうか。

（元「群像」編集長／渡辺勝夫）

◆人間の恐怖

人間は優しく真面目で正義なところもあるが、一方で帯理を虐殺を繰り返す。それがますますエスカレートしていく。依存症になる。そして核兵器まで作り出してしまう。人間の恐怖。それが我々すべての人にある。

（エッセイスト／田中浩司）